宗教に於ける「愛」と「慈悲」の本質

——キリスト教と仏教との対比として——

岡　　邦　　俊

序　　説

私がこの小論に於て何を意図しているかの要約について初めに少し述べておきたい。私はこの小論に於て，先ず一般的人間愛と宗教的愛とについて検討してみたい。「彼は彼女を愛している」とか，「彼は慈悲深い人である」とか云う場合の，所謂人間的愛とか慈悲と云われるものは何であろう。即ち，人間が人間を愛すると云う時の愛や，慈悲深い人間であると云われる場合の慈悲が，「神の愛」とか，「仏の慈悲」と云われる場合の愛と慈悲とに対比して如何なる類似点なり相異点を有しているであろうか。こゝではエロースとアガペーの問題が中心となるであろう。広く人間の愛は—慈悲を含めて—対象や相手の価値に動かされて生れるものであり，これに対して神の愛とか仏の慈悲と云われるもの，即ち宗教的愛は対象や相手の価値や功績に関係なく発動するものである。

エロースは一般にこのような人間的愛を表現するものと理解されてよかろう。これに反して宗教的愛としてのアガペーは絶対，純粋の愛，換言すれば相手を愛するために何の条件も必要とせず，何の報償や期待をも予期しない愛なのである。

このような性格を持つ宗教的愛，アガペーとしてのキリスト教的愛と，仏教的慈悲とは一見甚だしく類似し，その深さや純粋さに於ても全く同一とさえ思われる点もあるが，その両者の根本的相異点が依然として存することを私は指摘したい。かゝる根本的相異点は実に宗教としてのキリスト教と，仏教との根本的性格の相異点を土壌として発生したものと云わねばならない。即ち，キリスト教は純粋なる一神教であり，人間と神とをどこまでも峻別する二元論であり，これに反して，仏教は本来的には汎神論であり，人間としての衆生と仏とを一体，同体として全く分別しない自他一如，生仏一如の一元論でもある。[1] このような両教の根本性格の相異が，愛と慈悲の深さや純粋さに於て類似しているにも拘わらず、依然としてそこに大きな相異点のあることを私は指摘したい。このことはキリスト教と仏教との比較に於ても重要な課題とのなるであろう。かくして私はキリスト教と仏教との対比についての考察の一環として，こ小論に於ては愛と慈悲との本質概念を究明しようと意図したのである。この究明をとおして，やがてはキリスト教と仏教との対比に於ける，二つの宗教の比較研究の課題に何等かの答えを与えようとしたものである。

1. キリスト教に於ける愛の本質

キリスト教は愛の宗教であり，神の愛を説き人間の愛を説く宗教であると考えられている。事実，キリスト教の中心をなす神の思想，信仰の中で最も重要な意義を持つものは，「愛なる神」「神の愛」である。もとより神には幾つかの重要な属性なり根本性格を持ってはいるが，[2]神が愛であるとの属性はそのまゝ神の本質をなすものと考えて差支えないであろう。[3]聖書の表現によれば，神が愛であることについて次のように示されている。

「神は愛である」[4]

「神の愛がわたしたちの心に注がれている」[5]

「わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって，神はわたしたちに対する愛を示されたのである」[6]

「高いものも深いものも，その他どんな被造物も，わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から，わたしたちを引き離すことはできないのである」[7]

「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった」[8]

以上は聖書の中で，神の愛について述べられたものの中から，僅かな例を引用したにすぎない。併し，それによっても神が愛であることを実証することは充分であろう。

神が愛であれば，人間はこの神を心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，愛することが説かれ，[9]更に，自分を愛するように自分の隣人を愛し，[10]汝の敵をも愛する[11]ことが要請されているのである。

では，キリスト教で説かるゝこのような神の愛の本質は何であろう。我等人間も又愛することが出来る。併し，人間の愛と神の愛とはその言葉は同一ではあっても，その内容なり中味に於ては，両者の間には本質的な相異点のあることが教えられている。では，その本質的相異点とは何であろうか。ニーグレン氏はこの点について，彼の著「アガペーとエロース」Ⅰ[12]に於て徹底的にこの課題を究明しようと試みたのであった。こゝで彼の主張に関する重要な言葉を若干紹介して，キリスト教の説く神の愛の本質がアガペーであり，それと対立する人間の愛がエロースであることを明らかにしておきたい。

神の愛と人間の愛とは「二つの対立する愛の観念」[13]である。而も「キリスト教の愛は，本質的にアガペーである。」[14]このアガペーに対立する人間の愛，異教の愛は「プラトンのエロースの学説に最も完全に表現されている，あの対立する愛の観念である。」[15]ニーグレン氏は言葉を続けて，「キリスト教のアガペーの観念は，この広い世界に登場すると，この別個の見解が宗教と倫理の分野を占領しているのを発見するのである。異教の世界は，エロースの観念で全く充満していた。アガペーとエロースの遭遇は，キリスト教の運命の時機だったのである。アガペーは古代のあらゆる価値の逆転だった。」[16]かくて彼は又，「両者の差違をできるだけ明白に

することが，最も重要である[17]」と主張し，「エロースとアガペーの観念が，二つの相異した精神界に属している[18]」こと，「それらは，実際，直接比較することも不可能に見える位，相異しているのである[19]」とさえ断言した。同じ愛と云う言葉を使用しながらも，エロースとアガペーとは，それの優劣ではなくて，それの性格を根本的に異にするものであることを忘れてはならない[20]。では，キリスト教におけるアガペーの観念の中心性はどこにあるであろう。そして又，エロースとの根本的相異点はどこにあるであろうか。今こゝでは歴史的研究としては極めて興味ある純粋アガペーと，ヘレニズムや新プラトン主義との混合の関係，更には，旧約を中心とするユダヤ教で説かるゝ愛とキリストによる新約の愛との関係についてはすべて割愛して，直ちに，アガペーの本質と一般的人間の愛としてのエロースとを比較し，その性格の根本的相異点を明にしたい。こゝで又私はニーグレン氏の主張を借りて，二つの愛の本質的対比を試みたい[21]。

(1) アガペーは自発的で「誘発されないもの」である。神の愛はその対象の価値によって決定されたり，誘発されたりすることがない。こゝでは常識的には神の愛を受くるに値いしない罪人であっても，律法の義に反する者であっても，なんの功績なき人であっても，神の愛は惜しみなく注がれるのである。

愛せられる価値あるもの，なんの罪なきもの，律法の義や功績が神の愛を誘発することは出来ない。神の愛は全く自発的で相手の持つ価値や功績と云う条件によって動かされることはない。神の愛には制限がない。これがアガペーの本質なのである。

これに対して，エロースは常に対象の価値と条件とによって誘発され,左右される愛である。愛せられる価値あるもの，条件を具備するものが愛の対象となるのである。これがエロースの本質である。

(2) アガペーは人の功績にかかわりがない。このことは前述のアガペーは誘発されない，との本質の中に必然に含まれている事実である。イエス・キリストは「わたしが来たのは義人を招くためではなく，罪人を招くためである[22]」と云われていることからも理解出来よう。神聖なる神が罪人を愛するときには，相手の功績や価値の問題は存在しないのである。義人への愛も，罪人への愛も全く神の愛としては同一であり，相手の罪や義によって誘発されたものではない。神は罪人を彼の罪にも拘わらず愛するのである。併し，神は正しい義人をその正しさの故に，義人であることを理由にして愛するのではない。それがアガペーの無制約性である。

このような相手の功績に拘わりなく，罪や義にも拘わりなく注がれるアガペーに対して，エロースは人間の功績であり，救いを得んとする人間の努力である。

エロースは全く制限的であり，相手の持つ価値，無価値，善悪，美醜，罪や義によって条件づけられ，制約され，誘発される愛である。相手が愛される条件を持つが故に，それを理由として働く愛の本質がエロースである。

(3) アガペーは創造的である。神は創造主であり，従って，神はそれ自体の中に愛される価

値や条件のあるものを神が愛するのではない。それとは全く反対に，それ自体の中には何らの価値なきものこそ，実は神の愛の対象である，と云う事実によって価値を得ると云うことなのである。神から愛される人は，自己自身のうちに何ら愛される価値を持っているのではなくて彼の価値はたゞ神が彼を無制約，無条件に愛すると云う事実にあると云わねばならない。

これに対して，エロースは前にもしばしば対比した如くに，あくまでも人間自身の中に，人間の側に愛される価値，条件，資格を持っている時にのみ発動する愛なのである。エロースは自己中心の愛であり，それは結局は自己主張の一形態にすぎない。

(4) アガペーは神との交わりの道を開く。神と人間との関係のあり方を，本質的に規定するものがこのアガペーである。神と人間と交わる道は律法の義でもなく，又，功績の道でもない神のアガペーのみが，創造的な力として，人間に神との交わりの道を開くのである。アガペー以外の道によっては，いかなる方法をもってしても，人間が神と交わり，人間が神に到達する可能性はあり得ない。人間の側から神に到る道はないのである。

エロースは人間が自らの功績と努力によって神に到らんとする道である。併し，エロースをいかに働かせ，これを積みかさねても，それは所詮神と交わる道とはなり得ないであろう。エロースによって神に到る可能性はない。神自身が神の愛アガペーによって人間に到ることの外には，エロースによって人間が神に到る道はない。

以上に於て私はニーグレン氏の主張を中心として，アガペーとエロースの本質的性格を対比し，その根本的相異点を明にした。四項目にわたる氏の説明や主張には内容的には若干の重複もあったが，これによって氏の主張するアガペーの如何なるものかは大略究明されたと思う。

私はこゝで神の愛，アガペーがその究極に於て，十字架上に万人の罪の贖いのための死として，彼の犠牲と受難とに終結される点にふれ，後に到って述べるであろう仏教の慈悲との対比のための資料としてみたい。

既に述べたロマ書の5章8節や，イザヤ書の43章3節4節，63章9節等にも示されている如く，イエス・キリストは万人の救済主として，神の愛の最高の実例として，自らには何の罪なくして，万人の救いのために代わって犠牲となり受難した「十字架上の死」は，まことに尊くも悲壮でさえあった。神の愛はこの十字架でのキリストの死によって，最も具体的に，最も完全な形で，而も最も尊貴な形で現われ，終結したものと云えよう。

このことは仏教的大慈悲の根本性格としての，菩薩道に於ける「代受苦」[23]にも似た愛の具現であると云わねばならない。人類の罪の贖いのため自ら代って犠牲となり受難した十字架上のイエスの死と，菩薩の代受苦との対比についての詳論は後に譲って，私は次に，仏教に於ける仏の慈悲について，そして，この慈悲と人間の愛との本質的性格を検討してみたい。

2. 仏教に於ける慈悲の本質

私は先ず経典や論釈に於て慈悲が如何に仏教に於て理解されているかの実例について若干の

引文をこゝにあげておきたい。

「大悲なき者は仏と名づけず」[24]と云われ，「菩提の因は大悲を根本となす」[25]と云われる位である。

古い経典である経集の中に慈経と呼ばれるものの中で，釈尊は仏道修行者の心得として次のように教えている。[26]

「生きとし生ける者に，幸いあれ，安穏なれ，安楽あれ，（中略）生きとし生ける者に福祉あれ。」

「たがいに他人を毀るなかれ，いづこの何人をも蔑むなかれ，瞋にかられ，腹立たしさにかられて，他人の苦しむを欲すること勿れ，恰かも母がその独り児を，身命を賭して護るがごとく，そのごとく，一切有情に対して，無量の慈悲の心を修習せねばならぬ。また，まさに一切世間に対して，無限の慈悲心を修習せねばならぬ。上にも下にも，また横にも，障礙なき，怨恨なき，敵意なき慈しみを修せねばならぬ。」

人間が仏道修行にはげむとき，同じ人間の仲間に対して釈尊は「無限の慈悲心を修習せよ」と教えたのである。それは，自分と同じ悲しみ悩み苦しみによって，人生を生きている仲間への同悲同苦の心である。

古き経典[27]には又「四無量心」「四等心」として，「慈，悲，喜，捨」をあげ，凡ての人間に対して楽を与え苦を離れさせる努力と工夫こそは，実に仏道修行者の実践に於ける最高の目標でもあった。即ち，慈は相手に真実の楽，幸福を与える「与楽」であり，悲は相手から苦悩の根源を抜きとってやる「抜苦」であり，喜は他人の楽，幸福をみて喜ぶ心であり，捨は他人に対して愛憎親怨の心がなく，平静にして平等の心であると云われている。

「仏心とは大慈悲これなり」[28]とは，仏の心，仏の本質は実に大慈悲であることを教えた言葉である。

「諸の衆生の為に無利益を除く，これを大慈と名づけ，衆生に無量の利楽を与へんと欲す，是れを大悲と名づく」[29]又，慈悲の働く縁となるものを三種[30]あげ，その三つの中で「無縁」と云われるものこそ，仏の大慈悲であり，この慈悲は自己にとって何の縁なき利害関係なき者にも限りなく働きかける無条件的慈悲であることを述べている。[31]

其の他の経，論釈[32]にも仏の慈悲について述べるものは多いが，こゝに私は大智度論にあげられている仏の大慈悲について引用しておきたい。

「仏の大慈悲は真実にして最大なり。復次に小慈は但だ心に衆に楽を与へんと念ずるも，実に楽事なし。小悲は衆生の種々の身苦心苦を観ずるに名づく，憐愍するのみにして脱せしむること能はず。大慈は衆生をして楽を得しめんと念じ，又楽事を与ふ。大悲は衆生の苦を憐愍し又能く苦を脱せしむ。（中略）復次に是の大慈は十方三世の衆生乃至昆虫に遍満し，慈は骨髄に徹して心捨離せず，三千大世界の衆生の三悪道に堕せんに，若し人ありて一一皆代りに其の苦を受け，苦を脱することを得しめ已りて，五所欲の楽，禅定の楽，世間最上の楽

を以て自ら恣に是れを与へて皆満足せしめんも，仏の慈悲に比するに千万分中の一分にも及ばず，何を以ての故に，世間の楽は欺誑不実にして生死を離れざるが故なり。[33]」

かくて，仏の大慈悲は人間の苦悩の根源を抜きとり，人間に真実の楽事を与える，広大無辺の憐愍の心であり，真実にして最大の同苦同悲の情であり，更に，凡ての人間に代はってその苦を受くる崇高なる代受苦でもある。[34]

仏の愛としての大慈悲の性格とは実にかくの如きものなのである。而もかゝる「大悲」は世の常の盲目的愛ではなく，あくまでも「大智」より流動するものであることを忘れてはならない。

あくまでも「悲は智の働き，智は悲の主体」[35]でなければならない。それは又「如来の智慧に依りて衆生を救度す」[36]とか，「如来の智慧に大勢力有りて能く衆生を救ふと知る」[37]と云われる理由でもあろう。

ともあれ，仏教の説く慈悲，特に，仏の大慈悲の本質は，人間の苦悩の根源を抜きとり，真実の幸福，楽事を保証することである。かゝる大慈悲は無縁の大悲として，相手に何の条件もつけず，相手とは何の利害関係もなく，凡ての人間，否，草木，昆虫にまで発動するものである。かゝる大悲は又無量寿経に説かるゝ「無蓋の大悲」として，無制限，無制約のものであり蓋の無い大慈悲であり，更に，この大慈悲は自他不二の「同体の大悲」[38]であり，相手の苦しみをそのまゝ自己の苦しみと同感し，相手の喜びをそのまゝ自己の喜びと同感する「同悲同喜」の心である。大悲の本質は同感である。[39]恰も体の一部が傷きいたむならば，体全部が同時にいたむと同様であり，相手と自分との間に何ら差別を認めない一体観的愛なのである。

仏教では一般的人間の愛，相対的，有限の愛を大慈悲に対して小慈悲と云い，[40]又，「聖道の慈悲と浄土の慈悲」[41]と分けて呼ぶこともある。[30]結局は不完全なる，不徹底なる人間の愛の制約と限界とを認めたものである。

こゝで私は仏教で使用される「愛」なる言葉の理解について一言しておきたい。仏教に於て愛なる言葉が使用される時，その多くは悪しき意味に受けとられ，そのまゝの形では，仏道修行のためにむしろ障害となるものと解されている。釈尊の悟りを完成させた根本真理として説かれている「四聖諦」に於ては，人間の生活は諸々の苦しみにみちている，との真理としての苦聖諦が説かれ，この人生苦の根源となるものは「渇愛」と呼ばれ，それは，のどの渇ける人間が水をむさぼりのむが如き，まことにはげしい人間の欲望であると解されている。即ち，渇愛は人間の欲望の本源であり，その内容となるものは「欲愛と有愛と無有愛」とされ，これは所謂広義の「愛欲」と考えられている。かくて渇愛はショーペンハウェルの云う「生きんとする盲目的意思」を思はせ，現実の世界と人間生活をうみ出す根源の力であり，人間関係を成立させる本質的エネルギーとも解される。この渇愛の中味となっている欲愛は自己延長の欲求としての性欲であり，有愛は自己保有の欲求としての食欲であり，無有愛は名誉権勢欲を中心とするものである。[42]而も，このような本能的，動物的愛は本来的には「善悪以前」[43]のものであ

る。併し，この渇愛をそのまゝ肯定し，それを野放しにすることは望ましいことではなく，もとよりそれは悟りへの道に通ずるものではない。人間はこのような自然の愛をよく調整し，耕作することによって，善美なる愛にまで昇華した時，初めてこの愛が全人類的，普遍的愛として，悟りえの道に通じ，大慈悲の実践として聖化され浄化されるものとなるであろう。ともあれ，仏教に於ては人間の愛はそのまゝの形では望ましきものではなく，むしろ悟りえの道，仏への道にとって大きな障害となるものである。併し，かゝる人間の愛の最も純化され，普遍化され，人類化されたものとしての仏の大慈悲とても亦，実にその本源に於ては全く人間的愛に根ざすものであることを忘れてはならない。換言すれば，人間的愛とは全然別個に，独立した異質の愛があって，それを大慈悲と名づけるのではない。大慈悲はあくまでも，相引く力としての愛，男女を相結ばせ，親子を相愛させ，隣人相交渉する根源的な力としての人間の愛を，その自然のまゝに放置せず，「愛のかゝるあり方を批判し，否定し，高め調え来って」[44]後にこそ，大慈悲にまで昇華されるものである。これが仏教の愛と大慈悲についての基本的な考え方である。この点は後に詳論するが如くに，キリスト教のエロースとアガペーとについての考え方とは根本的に異るものがある。従って，人間的愛と仏の大慈悲とは全くの異質ではなくて，むしろ同質であり，エロースとアガペーとを全くの異質と考える，キリスト教の理解とは根本的に相違するものと云はねばならない。

3. アガペーと大慈悲との対比

キリスト教的愛，エロースと対立する神の愛としてのアガペーと，仏教の慈悲，特に，仏の大慈悲とを対比して，私はその類似性と相異性とを明にしてみたい。既に言及した如くに，アガペーと大慈悲の類似性は次の点に要約されるであろう。

(1) アガペーと大慈悲とは共に全人類に普遍的に発動する最も純粋にして絶対なる利他愛である。アガペーと大慈悲の対象となるものは全人類であり，全存在であって，そこには何の制約もなく制限もない。或る対象には働きかけるが，他の対象には働きかけないとか，或る対象には注がれるが，他の対象には注がれないと云うが如きものではない。相手がこのアガペーと大慈悲を受くるに値いするが如き，価値と功績とを持つが故に，その相手に制限して働きかけ注がれるものではない。いつでも，どこでも，すべての人類，存在に無条件に働きかけるものがアガペーであり大慈悲である。

(2) アガペーと大慈悲とは無条件的である。既にのべた如くに，一切の人類，一切の存在に働きかけ，注がれるものがアガペーであり大慈悲である。善人であれ，悪人であれ，美人であれ，醜人であれ，男子であれ，女子であれ，老人であれ，青年であれ，貴人であれ，賤しき人であれ，それらに拘はりなくアガペーも大慈悲も働きかける。相手の価値や功績には無関係にそのようなものを何の条件とはせずして働きかけてくるものである。

(3) アガペーと大慈悲とは自発的である。愛の極地としてのアガペーと大慈悲とは，それ自身の意思の発動によるものであって，他のいかなるものもこれを強制したり，誘発することは出来ない。神自身の，仏自身の自由なる意思の働きによって，アガペーも大慈悲も働き出るものである。又その発動を他のいかなるものも制止し防害することは，絶対に不可能である。またアガペーと大慈悲は静止するものではなく，絶えず活動するもの，全存在に絶えず働きかける本質を具備しているものである。

(4) アガペーと大慈悲とは無報償性である。相手の対象に何の条件もつけず，何の制限，制約もなく全人類，全存在に自発的に発動するアガペーと大慈悲は，その対象に対して何の代償も要求しないものである。汝を愛するが故に，愛したるの故に，それに代はるべき報償を相手に要求するが如きものは，アガペーとは云われず，大慈悲ではあり得ない。従って，アガペーと大慈悲とは相手に対して自己の愛の代償として，いかなる種類の報償をも期待しない。相手がかゝる愛の代償として恐らく何かを返報するであろうことを前以て期待するが如きは，アガペーと大慈悲の根本性格に全く反することである。あくまでもアガペーと大慈悲は，相手に報償を期待したり要求するが如き，下心あって相手に働きかけるものではない。この意味に於てアガペーと大慈悲の発動は徹底的に自然且必然の性格を持つと云わねばならない。

(5) アガペーと大慈悲とは代受苦である。アガペーと大慈悲の極地は全人類，全衆生のために代はってイエスが受難し死の苦しみを受け，ボサツが，仏が苦悩を受けると云う，所謂「代受苦」に存すると云えよう。イエスは全人類の罪の贖いのために，自らには何の罪もなくして十字架上に受難し，犠牲となって死に，それによって，全人類が罪なき状態にたち戻り，天国への復帰を保証される，と云うのが愛の宗教としてのキリスト教の救済の本義とされている。仏，ボサツも亦自ら超発した崇高なる四種の誓いと願いに基いて，無辺の衆生を済度し，無尽の煩悩を断滅し，無量の法門を学習し，無上の仏道を成就せんとした。上に向ってはボダイ，崇高なる悟りを求めながらも，下に向っては人生苦に悩む全人類，全衆生を教化し済度せんことこそボサツ道の本義である。ボサツ，仏の仏道修行，悟りへの道の努力は，あくまでも本来的には自己一人がためのものではなく，この努力修行によって，やがては全人類をして仏と同じ悟りの境地へ到らしめんがための志念なのであった。「衆生病むが故に仏又病む」[45]の意趣，「衆生の苦悩は我が苦悩なり，衆生の安楽は我が安楽なり」との，衆生と仏との同苦，同楽は全く根源的には仏，ボサツの代受苦的大乗精神に基因するものと云はねばならない。

神の本質が愛であると云うこと，仏の本質が大慈悲であると云うこの事実の中に，以上のべた五点は凡て包含されるであろう。まことにアガペーとは，そして又，大慈悲とはかくの如き本質を自然必然に具有するものの意なのである。

さればこそ，「神は愛なり」と云はれ，「仏心とは大慈悲これなり」と云はれるのである。私は以上の五点につき，アガペーと大慈悲との類似性を指摘したのであるが，かゝる類似性の存するにも拘わらず，アガペーと大慈悲とを正しく理解するためには，次の如き相異点を忘れ

てはならないであろう。先ずこの点について私は増谷文雄教授の極はめて貴重な解釈をこゝに要約しておきたい。[46]

教授によれば，もともと自然的，本能的であった人間の愛を批判し，否定し，高め調え来って，ついに人類的愛の高さ深さにまで聖化させ，遍満さすべきことを教えたのは仏教とキリスト教であった。併し，このような全人類的な愛の考え方を生み出すに到った過程に於ては，この二つの宗教は全く異った道を通っている。キリスト教の愛の実践は「神の愛の模倣」として行はれている。即ち，先ず上の方に神の愛，アガペーがあって，人間はこの愛を模倣するところに人間の愛，エロースが生れる。この人間の愛，それはもともと本能的な，動物的愛であって，これをいかほど高めても，神の愛には到底いたることの出来ぬほど，アガペーとエロースは本質を異にする異質のものである。「天にいます父」[47]それは愛なる神であるが，その「父の子となるため」[48]，「天の父が完全であられるように，あなたがたも完全な者と」[49]なるために，神の愛を人間は模倣するのではあるが，人間の愛エロースは決して神の愛アガペーとは同一でもなく，同一になり得るものではない。そこにキリスト教的愛の根本構造がある。たゞ模倣しつつ接近しようと努力するのみである。かくて隣人に対し，貧しき者に対し，いと小さき者に対して愛を実践することが，神を模倣し，神を愛することであり，神からも愛される道である

仏教に於ける全人類的，普遍的愛としての慈悲の根本構造は，模倣ではなくして，人間自身の愛の中に内在する同悲の感情を通して，全衆生の上に拡がりゆく慈しみの心である。

人間の愛と仏の慈悲とは本質的に異質なものではなくて，人間の愛の中に慈悲化する本性を内在させているのである。釈尊の歩まれた悟りへの道は，釈尊自身の宣示された如く「これ多人の利益，多人の安楽，世間の哀愍のためなり」を根底とする，全衆生との同悲同苦，相手と同じ心になって悲しみ，相手と同じ心になって苦しむ，又，楽しみ，喜ぶと云う相手との一体観，同体観に土台するものである。「自己よりも愛しいものはない，それと同じように，他人にとっても自己が一番愛しいものである。なれば自らを愛する者は，他の者を害してはならない」。そこには「惻隠の情」と「愛憐の情」が力強く動いている。この情こそ仏教に於ける慈悲の本質を構造するものであろう。かくて，仏教の慈悲は人間の愛とそのまゝではもとより同一ではないが，人間の愛の自然の発動を高め，深め，昇華した時，そこに普遍的，全人類的愛としての大慈悲が成立するのであるから，慈悲と愛とは本質的には異質ではなく，むしろ，同質であると云わねばならない。

若干の私見を加えたが，以上で増谷教授の見解を私の立場で一応整理してみたのである。結局，教授の見解では，キリスト教と仏教にあっては，人間的愛が普遍的愛を生み出す道順が根本的に異ることを指摘したのである。

この立場を更に，私は一歩進めて次の如く整理してみたい。エロースはアガペーの模倣であり，人間の愛は神の愛を見倣えるものであり，本来両者は根本的に対立する二元的存在なのである。エロースはアガペーに模倣によって近づくことは出来ても，アガペーそのものになり切

ることは不可能である。蓋し，エロースとアガペーとはその本質を異にするものであるから。このことは実に，キリスト教に於ける根本前提としての，「人間は神の手によって創られたる被造物であり」[50]，「神は主であり，人間は僕である」[51]とのキリスト教的世界観，更に，「神と人間とは全く本質を異にし相互に対立する二元的存在であり」[52]，「神は唯一絶対であり，人間は神には絶対になり得ない」[53]と云うキリスト教的神観と人間観の当然，必然の帰結と云わねばならない。「神は全，人は無」[54]こそ，キリスト教的思想，信仰の根底をなすものである。

これに反して，仏教に於ける慈悲の原型は人間の愛の中に見出されるものであり，この愛の最も高く深く純化され聖化され，普遍化されたものこそが慈悲なのである。人間の愛そのままは決して望ましきものではなく，むしろ仏道への障害となるものでさえある。併し，この人間にとって本質的な愛がよく整調され，他人との同悲同苦の立場に立って普遍化され，全人類的のものとなったものこそが慈悲なのである。

かくて，仏の慈悲も人間の愛も根源的には全く同質である。むしろ，人間の側に属する愛なくば，抽象的，観念的，普遍的な慈悲の成立はあり能はぬ程のものである。こゝでは，「一切衆生悉有仏性」[55]と主張し，「草木国土悉皆成仏」[56]を説く，大乗発達仏教の特性に於て見らるゝ「汎神論」的世界観なり人間観が基本となっている。即ち，キリスト教的世界観なり人間観と明かに対立する，仏教的世界観なり人間観との根本相異が，そのままアガペーと大慈悲との根本相異となったものと云わねばならない。アガペーは神に出発し，慈悲は人間に出発するものと云えようか。慈悲の二字は読釈されて「抜苦与楽」と云われ，「愛憐を慈と名づけ，惻愴を悲と曰う」[57]との，慈悲の解釈にあっても明かな如く，その原型は全く人間に属するものであって，アガペーの如く本来的に神にのみ属するものではない。

宗教としてのキリスト教の全思想，信仰は神に出発し，世界の創造者，唯一者，超越者としての神の存在なくばキリスト教は存在し得ない。これに反して，宗教としての仏教は人間に出発し，人間の最も高く，深く，純化され，昇華され，調御されたる理想の人格こそ覚者として仏陀に外ならない。かくてキリスト教は本来的に「神学」に属し，仏教は根本的には「人間学」に属するものであるとも云えよう。

キリスト教にあっては，神と人間とは全く本質を異にする異質的二元であり，神と人間とは永遠の平行線であり，神と人間との交わる道，人間が神になる道は絶対にとざされている。神は永遠に神として，人間は永遠に人間としての座を離れることは許されないであろう。「父なる神の御旨に従うことによって」[58]人は神の子となることが出来るが，「そのことは人間が神と同質であることを意味しない」[59]のである。天国にあってさへも，父なる神と僕としての人間の座は峻別され，神と階に生きることまでは許されても，人間が神になることはこよなき神への冒瀆として絶対に許されないことである。こゝにエロースとアガペーとの異質的愛が二元として存在し，エロースは絶対にアガペーになることを許されない根拠が存するわけである。蓋しエロースは人間に属する愛であり，アガペーのみが神に属する愛であるから。

これに反して，仏教に於ける人間の愛，慈と読釈される愛憐の情も，悲と読釈された惻愴の心も，それは全く人間の愛の深き処に根源するものであり，全く人間的のものでありながら，それの純化と普遍化，全人類化によって，やがて仏心としての大慈悲にまで通ずる本性を有している，との立場が仏教なのである。かゝる思想，信仰の根源となるものは，キリスト教とは本質的に異る，仏教の，特に大乗仏教に於ける汎神論的，生仏一如的な世界観なり人間観に基因するものと云わねばならない。最後に宗教的愛の極地としての代受苦についてのべておきたい。

既にのべた如く，キリスト教は愛の宗教として，神のアガペーを説き，その愛の極地としての「十字架」を説いている。今こゝでは十字架の深き意義を詳論することは出来ない。たゞ十字架がすべての罪人の救いのために，罪の贖いとして，何の罪なき神の独り子イエス・キリストが代はって犠牲となり，死の苦難を受けた，と云うこの代受苦と，仏教に於て大慈悲の極地として説かるゝ仏，ボサツが一切の衆生に代はって苦悩を受け，やがて一切の衆生をして悟りへの道を完成した，とする代受苦との対比を試みたいのである。この対比は実はそのまゝ仏教とキリスト教との，本質的な相異点にもつながる重要な課題を提供するであろう。

キリスト教信仰によれば，アダムの原罪以来，人間は「世々神の前に罪を犯せる敬虔ならぬ者」[60]となり，「神の前に義人として立ちうるものはなくなった」[61]と云はれ，「自然的な人間はこの罪から逃れることはできない」[62]とされている。即ち，キリスト教にあっては世のすべての人間，「世のいわゆる善人」さえも「罪人でないことはできない」[63]とされ，かゝる「罪の払う価は死なり」[64]と考えられている。かくて「罪をおかさないことができた状態から罪をおかさないことができない状態へ堕ちた」[65]すべての人間に代はって，「神が罪人たる人間との交わりを回復し」[66]，天国への復帰を実現するための神の愛の極地が，キリスト教の十字架である。神の義を実行し，律法の書に記されたる事を実践できずして，永劫に詛はるべき罪人は罰されねばならない，そして神の義はあくまでも実行されねばならない。而も又同時に，「神の愛は一人の亡ぶるをも欲し給わず，すべてのものを救わなければやまない」[67]との矛盾の中に，「神の痛みが現はれたのである」[68]が，この矛盾の解決が十字架なのである。即ち，イエス・キリストは罪あるすべての人間の罪の贖いのために，救いのために，自らには何の罪なくして十字架上に苦難の犠牲となったのである。かくてキリストの十字架は神の子としてのキリスト自身にとっては「犠牲」であり，「苦難」として受けとられている。犠牲なり苦難とは云うまでもなくその意味するものは，キリスト自身には「犠牲となり苦難を受くべきような，何の罪も不義もなかった」[69]と云うことを前提し，更に，「このキリストは神の子として一般の人間とは全く本質を異にする神性を保有する者である」と云うことを前提とするものである。換言すれば，罪なき神の子が罪の人間に代はって十字架で苦難を受けたこと，そのことこそ犠牲と受難の本義なのであろう。神と人間とは，どこまでも異質であり，二元的平行線としてのキリスト教的神観が，かゝる犠牲や受難の前提であり根底である。尚キリストの十字架に倣いて人間は各自

の十字架をせ負うことを忘れてはならない。

これに比して，仏の大慈悲の発動として，一切の衆生に代はってあらゆる苦悩を受けた，とする代受苦の思想には，キリスト教に於けるが如き犠牲とか受難と云った悲壮な色彩，否，意義は全くない。このことは注目すべき重要な点であろう。即ち，仏教にあっては，既にしばしば述べた如くに，衆生，人間と仏とは本来一体，同体であって，衆生なくして仏はあり得ないし，仏なくしては衆生はあり得ない。衆生の存在と仏の存在とは全く不二，一体であり，生仏一如である。「衆生病むが故に仏また病む」のであり，「衆生苦悩我苦悩，衆生安楽我安楽」[70]であって，苦，楽共に仏と衆生とはあくまでも一体の立場，同体の立場，一如の立場にあるのである。従って，仏が衆生に代はって苦悩することは，大慈悲者としての仏にとっては，やむにやまれぬ，自然にして必然の仏心の発動なのである。決してそれは犠牲でもなく受難でもない。親が子のために苦しむことが犠牲であろうか，又，受難であろうか。それは至極当然のことであり，自然にして必然の「親心」であろう。況んや「仏心」に於ておやと云わねばならない。尚代受苦思想は仏道修行者のすべてが実践すべき最高の規範であることを忘れてはならない。

かくてキリスト教と仏教との根本性格が，そのまゝ愛と慈悲，そして代受苦思想にもよくその性格を現はしていることは極わめて注目すべきことであろう。

〔註〕

1 金子大栄・華厳経概説136頁 140頁
2 天地の創造者・創世記1—1外
不死者・テモテ前書1—17
全能者・創世記17—1外
遍在者・詩篇139—7—10
全知者・詩篇139—1—6
永遠者・申命記33—27
不可見者・ヨブ記23—8・9外
霊・ヨハネ伝4—24外
唯一者・マルコ伝12—32外
救済者・イザヤ書43—3・4
万物の所有者・詩篇50—10—12外
自然の支配者・エレミヤ書31—35
無限者・ヨブ記36—26
正義・詩篇45—21外
3 ヨハネ前書4—8
4 ヨハネ前書4—8
5 ロマ書5—5
6 ロマ書5—8
7 ロマ書8—39
8 ヨハネ伝3—16
9 マタイ伝22—37・22—39
10 申命記6—5
11 ルカ伝6－35・マタイ伝5—44
12 ニーグレン・アガペーとエロース第1巻 キリスト教の愛の観念の研究岸・大内訳
13 ニーグレン5頁
14 同右
15 同右6頁
16 同右
17 同右
18 同右7頁
19 同右
20 同右20頁
21 同右44—49頁
22 マタイ伝9—13
23 華厳経・普賢品外
24 涅槃経11
25 大日経1
26 南伝大蔵経・24巻52—54頁
27 中阿含21・雑—阿含21・倶舎論29

28 観無量寿経
29 大般涅槃経15
30 衆生縁（小悲）法縁（中悲）無縁（大悲）
31 大般涅槃経15・大智度論40・浄土註論上巻
32 華厳経・華厳探玄記・十住毘婆沙論等
33 大智度論27
34 華厳経・普賢品
35 鈴木大拙全集・3巻70—71頁
36 華厳探玄記12巻
37 同右
38 華厳経・起信論
39 華厳経概説138頁
40 大智度論27
41 歎異抄・4節
42 増谷文雄・仏教とキリスト教の比較研究 266頁
43 同右
44 同右267頁
45 維摩経
46 増谷・比較研究267—273頁
47 マタイ伝5—43—48
48 同右
49 同右
50 創世記1—1
51 コリント後書1—3・マタイ伝18—23—35
52 溝口靖夫・キリスト教の主要思想20頁
53 申命記5—7
54 オットー・聖なるもの・ハーヴェイ英訳本 22頁
55 涅槃経
56 法華経
57 大乗義章
58 キリスト教の主要思想33頁
59 同右
60 同右41頁
61 同右
62 同右
63 同右38頁
64 ロマ書6—23
65 キリスト教の主要思想86頁
66 同右85—6頁
67 マタイ伝18—14・ヨハネ伝6—39
68 キリスト教の主要思想87頁
69 ヘブル書9—27
70 華厳経概説136・138頁

（本学教授—宗教学）